

政治学概論 II 2024 w11 (2月6日2限) リーディングアサインメント:

建林・曾我・待鳥「議会制度の構成要素」(『比較政治制度論』)

氏名	Q1	Q2
赤星	p.176 のアジェンダ・ルールと採決ルールの相関について述べられている部分	理由は、様々な法や憲法の改正や夫婦別姓などの諸制度について議論されている現代の日本において、多数派に有利なアジェンダ・ルールでは多数派が保守的だとこれらの改正が進まなかったり、逆に採決ルールにおいても少数派がこれを盾にして議案の審議や採決を抑制したりすると、日本は変わらないのでその塩梅が重要になってくると考えたから。
岩田	「選挙制度や執政制度と議会制度が連動して、政治過程全体の構成を形成することが多いと考えられる。」(p.179)	議会制度だけに着目して、開放性を重視しているのかと効率性を重視しているのかで多数派と少数派のどちらに有利になっているのかを判断できるのではなく、選挙制度や執政制度も関係してくるという点が重要であると感じたから。各制度の場合の組み合わせによって、有利になる方が変わるということは、さまざまなケースがあるため、バランスを取るためにそれぞれに考慮して考えるというのは難しいと感じた。
内坂	私が面白いと思った箇所は、174 ページの採決ルールの部分である。	採決ルールにはさまざまなものがあり、多数派と少数派の動向についての部分が印象に残ったからである。決定の方法や、採決の回数によって、多数派の勝利が容易なものになったり、少数派が多数派の意向を阻止できる可能性が高まったりすることを学んだ。また、採決ルールは各国にほぼ共通して存在していることも分かった。二院制というのも採決ルールの要素の1つだと知ることができた。
宇名手	アジェンダルールと採決ルールの相関 (P.176~)	各国の議会がどのような体制で行われているのか、効率性と開放性どちらを相対的により重視しているのかで採用するルールにも違いがあり、また、向き不向きがあるということが重要なのではないかと感じた。また、議会制度と採用するルールの組み合わせには複数あるにも関わらず、相互に矛盾するような選択をしないという事についても面白いと感じた。
遠藤	政治社会において少数派の意思をどのように扱うかは議会制度によってのみ規定されないうことが重要だと思った。	議会は効率性と開放性のいずれかを重視するという選択を行っており、日本は多数派が有利である効率重視型であることで、批判につながってしまうのかと思っていたが、議会制度のみによって少数派の意見は規定されるわけではないため、そもそもの選挙制度の観点から考えると、その前に選挙の投票率の減少や若者の政治に参加しない姿勢などを問題として私たちは捉えなければならぬと考えさせられたから。
大石	P172 日本の開放性について	議会では効率性と開放性が重要視されている中で、日本では時折議員同士がもみ合う強制採決を行う場面も見られ、議会の開放性が常に保たれているのか疑問に思い、この部分が重要だと思ったから。また他国でも強制採決はとられることがあるのかについても疑問に思ったから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
大久保	採決ルール (p.174)	議会が決定を行う際のタイミングや方法を規定する制度である採決ルールというものがあることを知り、民主主義において何かを決定するという行為が非常に意義のあるのであり、考えていかななくてはいけないものであるが、議案がスムーズに進行していくことは重要であるが、少数派の意見もその採決に至るまでに考慮されないといけない。しかしながら、採決段階で少数派に有利なしくみがあると採決のスピードが落ちてしまうというパラドクスの関係を持っていると思った。
片山	日本もそれに含まれる 179	確かにこれまでの日本政治は、議会運営は与党がほぼ全部していた気がするし、過半数は普通に超えていたので与党が出した法案や予算は通っていた。なので、効率性は高いのかなと思うけど、開放性は低く、野党は蚊帳の外みたいな感じだった。しかし、現在は、与党は過半数切ったので、法案や予算が通りづらくなっている。また、委員会の委員長ポストも野党にも多く行っているの、少数派も輝き出した気がする。なので、今の日本の現状を考えてみるのも、面白いと思ったので。
加藤	4 ページのアジェンダルールについて	アジェンダルールには、権力の集中や不平等な扱い、重要な問題の取り扱いが遅れるなどの課題があると感じたからである。アジェンダを設定する権限を持つ人や集団がその決定を独占する場合や一部の議題が優先される際には、しばしば少数派の意見や問題が取り上げられないことがある。これにより、社会的不平等が生まれ、多様な意見を反映したりできなくなる可能性がある。そして、議論の幅も狭まっていく可能性も存在する。このように、アジェンダルールは政策決定や議論の方向性を大きく左右する分、透明性や多様性を確保することが重要だと考えられる。
喜多川	アジェンダルール	以前の授業で、憲法は選挙制度に対して規制がないため、与党が自分たちが選ばれるために有利な選挙制度を施行する危険性があるという話があったが、それに近い話なのかなという考えから興味を持った。ただこの場合は、選挙だけでなく、それら制度を決める議会における規定制度を意味していることが分かった。
黒田	採決ルール p174	決定を単純多数以外の採決方法で行うことで、少数派の意見も尊重することが出来る議会となるが、少数派の意見尊重を重視しすぎると全く決議できないし、逆に、民意が反映されていない意見が決定されてしまうこともあると思った。ここから、採決ルールはバランスを取る事がすごく難しいと感じると同時に、各国の採決ルールについてより知りたいと思ったため。
高橋	議会は相反する二つの課題を担った機関なのであり、すべての議会は効率性と開放性のいずれを重視するかという選択を行っているという箇所が面白いと思った。(p.172)	その理由は民主主義体制下の議会において重要な効率性と開放性の両要素を確保しつつも、やはりどちらとも完璧に遂行するには限界があるからこそ、効率性と開放性のいずれを重視するか選択している点が非常に合理的かつ現実的だと感じたからである。ここで効率性を重視するとももちろん利点もある反面、政策に関する十分な議論が行われなまま採決に至る可能性があるといった問題点が懸念される。この利点と問題点の両側面を内包することは開放性においても同様のことが言えるため、各国の議会ですっかり検討される余地がある議題だと考えた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
田辺	アジェンダ・ルールと採決ルールに注目することで、各国の議会が効率性と開放性のバランスを考えることができること (179 頁)	アジェンダ・ルールによって、法案の処理順や質問時間の配分、委員会制等が定められ、ルールの制定次第で多数派に優位をもたらす。一方で、採決は意思決定の最終段階であるという性質への考慮によって採決ルールが少数派にとって盾的な意味をもつ。このようにアジェンダ・ルールと採決ルールは、多数派、少数派それぞれに影響を与えると共に、効率性と開放性のバランスに影響を与えているから比較政治制度論において重要だと考えた。
為石（智）	多数派優位な日本では少数派の保護がなされない。 (pp.179)	日本の政治が不透明であるという話題をよく聞くが、開放性を求めすぎると少数派の権力が強くなり、効率が下がってしまうという論点は面白いと感じた。権力の一極集中や過度な分散が問題となっており、議会の場においても効率と開放性のどちらを重視するかが国によって大きく異なる理由が気になった。
丹後	議会制の基本要素 170-171	議会制度の基本的な構成要素について議論されており、特に議会の役割や民主主義における機能が整理されている点が重要だった。議会は単なる意思決定機関ではなく、選挙制度や執政制度と密接に関連し、政策形成に影響を与える。議会の正統性はどのように担保されるのか、また、意思決定の透明性や効率性をどのように確保するかが論じられていた点が興味深かった。特に、議会が執政部門からどの程度自律できるかという問題提起が印象的だった。
富谷	提案と審議のあり方を定める「アジェンダルール」と採決の決め方を定める「採決ルール」	この2つのルールの組み合わせが、各国の議会にそれぞれ多様な特徴を与えるという側面を持つことが書かれているため。アジェンダルールとは、議会の提出から審議にかけての議会運営の主導権を、どの程度掌握するかを規定する諸制度を意味しており、議会における多数派の主導権はアジェンダ権力と呼ばれる。また、採決ルールは議会が決定を行う際のタイミングや方法を規定する制度である。
西田	「アジェンダ・ルールが多数派優位な議会では～となる傾向がある。」 (179 頁)	このような部分が印象に残った理由は、アジェンダ・ルールの在り方によって、民主主義の規則に影響を与えると感じたからだ。多数派優位のルールでは少数派の意見が無視されやすいため民主主義のバランスが崩れるが、少数派の拒否権が認められるルールでは政策の多様性が確保されることで社会全体のニーズに応えることができる。このようなことから、民主主義である日本においてアジェンダ・ルールの在り方は非常に重要であると考えた。
野田	具体的な採用ルールが二院間の権限関係、定足数、多数決、投票記録とある程度共通していること (174 ページ)	民主主義を成立させ続けていくためには、議会における議論がとても重要なものになる。その点においては、民主主義を採用している国で共通認識であると思うし、そのためのルールが共通していることは納得だった。しかし、少数派の意見を尊重すればするほど、議会の効率性は低下するという記述を見て、確かにそのとおりであるけれど、やるせなさを感じるとともに、どこに重点を置くかといったバランスを保つことが大切だと思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
原田	p176-179 アジェンダ・ルールと採決ルールの関係について	アジェンダ・ルールが多数派優位な議会とアジェンダ・ルールが多数派に有利でない場合とでの少数派の動きや少数派に対する動きなどに変化があって面白いと感じたから。また、日本が前者であるアジェンダ・ルールが多数優位な議会であり少数派を保護があまりなされない国であるという部分についてもそれ自体が良い悪いではないと思うが、「効率性重視型」になっている要因やそれに伴う結果などについては考える必要のある部分かなとも感じたから。
藤井	議会運営について、開放性を重視するのか、それとも効率性を重視するのかについて (P.173)	議会運営について開放性と効率性のどちらを重視するかは難しい問題である一方、面白い内容であると考えたため選んだ。議会は国民のさまざまな意見を議員が代弁し、議論を進める場であると考えるため開放性が重視されるべきと思う反面、効率性がなかった場合国民の様々な意見を幅広く議論する時間が持てなくなるため、効率性を重視するべきとも思い矛盾が生じる。開放性と効率性どちらもが重視されバランスの取れた議会運営はどのようなものか気になった。
藤田	少数派が会期切れに持ち込むことで、多数派の提案を否決することが可能になる P175	少数派の意見が無視されないように、会期を設けることは必要な措置だと考える。しかし、2018年の「働き方改革関連法案」審議では、野党が厚生労働省のデータ不備を迫及し、審議を長引かせる戦略を取ったが、最終的には与党が会期を延長し成立させるといった事案があった。このように、少数派の意見を尊重する仕組みがあっても、中々その措置が今を成さない場合もあるため、議会のルールを再考することも必要だと感じ、この部分が重要であると思った。
本田	効率性と開放性 p171	法律を制定する際には、効率性と開放性の両立が大切だと感じたから。考えなければならない法律は多くあり、効率的に決定されなければならない。また、少数派にも意見を通してあげるなどの開放性も重要になってくる。そのため、法律を決める際には、この二つの点のバランスを保つことが大切になってくる。これらを考慮して法律は作られる必要があると知った。
松本	P.174 民主主義体制の最高意思決定の局面	民主主義においていかに多くの人の意見を採用するかというところに重きを置いた場合、多数決で意見を決めることは難しくなるということが課題としてあげられる。しかし日本の政治ではそのように感じる事が少ないため、なぜこのようなことが議論されるのか気になった。
三島	議会は相反する二つの課題を担った機関なのであり、すべての説会は効率性と開放性のいずれを重視するかという選択を行っている。(172 ページ)	「議会」という制度が単なる意思決定機関ではなく、「効率性」と「開放性」という相反する価値の間でバランスを取らなければならない存在として描かれている点が興味深い。また、「すべての議会は効率性と開放性のいずれを重視するかという選択を行っている」とあるように、議会の仕組みは一つの固定されたモデルではなく、国や時代によって変化するものだという視点も重要だと感じた。このように、議会が単なる「話し合いの場」ではなく、構造そのものが意思決定のあり方に大きな影響を与えるという点が、この一文から読み取れるのが面白いと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
渡邊	採決ルールについて（174 ページ）	多数派意見で物事を決定するというのは、迅速で簡単にすることができるが少数派意見の尊重というのも重要なのではないかと考えたからである。多数派だけの意見を尊重するというのを阻止するために、採決方法を変えたり、複数回採決をするといったことが重要であり、少数派意見が尊重される要因にもなるのではないかと考える。少数派意見にも無視することができないような意見も含まれていると思うので、多数派に限らず少数派も尊重していくべきである。